

有島武郎

親子



親

子

彼は、秋になり切った空の様子を硝子窓ガラスまど越しに眺めていた。

水々しくふくらみ、はっきりした輪廓りんかくを描えがいて白く光るあの夏の雲の姿はもう見られなかった。薄濁った形のくずれたのが、狂うようにささくれだって、澄み切った青空のここかしこに屯たむろしていた。年の老いつつあるのが明かに思い知られた。彼は先程から長い間ぼんやりとその様子を眺めていたのだ。

「もう着くぞ」

父はすぐそばでこう云った。銀行から歳暮せいぼによこす皮表紙の懐中手帳に、細手の鉛筆に舌の先きの湿りをくれては、丹念たんねんに何か書きこんでいた。スコッチの旅行服の襟えりが首から離れるほど胸を落として、一心不乱に考えごとをしながらも、気ぜわしなくこんな注意をするような父だった。

停車場には農場の監督かんとくと、五六人の年嵩としかさな小作人こさくにんとが出迎えていた。彼等はいずれも、古手拭と煙草道具たばこどうぐと背負い繩とを腰にぶら下げていた。短かい日が存分西に廻

って、彼の周囲には、荒らくれた北海道の山の中の匂いだけが漂ただよっていた。

監督を先頭に、父から彼、彼から小作人達が一列になつて、鉄道線路を黙だまりながら歩いてゆくのだったが、横幅のかった丈たけの低い父の歩みが存外しつかりしているのを、彼は珍しいもののように後から眺めた。

物の枯れてゆく香いが空気の底に澱よどんで、立木の高みまで這い上がっている「つたうるし」の紅葉が黒々と見える程に光が薄れていた。シリベシ川の川瀬の音に揺られて、いたどりの広葉が風もないのに、かさこそと草の

中に落ちた。

五六丁線路を伝って、一寸した切畦きりぎしを上るとそこは農場の構えの中になっていた。まだ収穫しゆうかくを終らない大豆だいず畑ばたけすらも、枯れた株だけが立ちつづいていた。斑まだら生ばえのした頑かたく々な雑草の見える場所を除いては、紫色に黒ずんで一面に地膚じはだをさらけていた。そして一箇所、作物の殻を焼く煙が重く立ち昇り、ここかしこには暗らい影になって一人二人の農夫がまだ働き続けた。彼は小作小屋の前を通る毎ごとに、気をつけて中を覗のぞいて見た。何処どこの小屋にも灯ひはともされずに、鍋の下の囲炉いろり裡火りびだ

けが、言葉通り幽かすかに赤く燃えていた。そのまわりには必ず二三人の子供が騒ぎもしないできよとんと火を見つめながら車座に蹲うずくまっていた。そういう小屋が、草を積み重ねたように離れ離れにわびしく立っていた。

農場の事務所に達するには、凡およそ一丁程の嶮けわしい赤土の坂を登らなければならぬ。丁度七十二になる彼の父はそこにかかるとさすがに息切れがしたと見えて、六合目程で足をとどめて後をふり返った。傍わきみ見もせず足にまかせてそのあとに蹠ついて行った彼は、あやうく父の胸に自分の顔をぶつけそうになった。父は苦にがにが々しげに彼

を尻目にかけて。負けじ魂の老人だけに、自分の体力の衰えに神経をいら立たせていた瞬間だったのに相違ない。しかも自分とは余りにかけ離れたことばかり考えているらしい息子の、軽率な不作法が癩にさわったのだ。

「おい早田」

老人は今は眼の下に見互みわたされる自分の領地の一区域を眺めまわしながら、見向きもせず監督の名を呼んだ。

「ここには何戸なんこはいつているのか」

「がけ崖地に残してある防風林ぼうふうりんの疎まばらになったのは盗伐とうばつではないか」

「鉄道と換え地をしたのはどの辺にあたるのか」

「藤田の小屋はどれか」

「ここにいる者たちは小作料を完全に納めているか」

「ここから上る小作料がどれ程になるか」

「こう矢継やつぎ早ばやに尋ねられるに對して、若い監督の早田

は、格別のお世辞せじけ気もなく穩おだやかな調子で答えていたが、

言葉が少し脇道わきみちにそれると、すぐ父からきめつけられた。

父は監督の言葉の末にも、曖昧あいまいがあつたら突っ込もうと

するように見えた。白い齒は見せないぞという気持が、

世故せこに慣れて引き締まった小さな顔に気味悪い程動いて

いた。

彼にはそうした父の態度が理解出来た。農場は父のものだが、開墾かいこんは全部矢部という土木業者に請負うけおわしてあるので、早田は謂いわば矢部の手で入れた監督に当たるのだ。そして今年になつて、農場がようやく成墾したので、明日は矢部もこの農場に出向いて来て、すっかり精算せいさんをしようという訳になつてゐるのだ。明日の授受が済むまでは、縦令たとえ永年見慣れて来た早田でも、事業の上、競争者の手先と思わなければならぬという意識が、父の胸には蟠わだかまつてゐるのだ。謂いわば公私の区別とでもいうもの

をこれほど露骨にさらけ出して見せる父の気持を、彼は
 何故なぜか不快に思いながらも驚嘆きようたんせずにはいられなかつ
 た。

一行はまた歩きだした。それから坂道はいくらも無
 くって、すぐに広々とした台地に出た。そこからずっと
 マツカリヌプリという山の麓ふもとにかけて農場は拡がって
 いるのだ。なだらかに高低のある畑地の向うにマツカリ
 ヌプリの規則正しい山の姿が寒々さむざむと一つ聳そびえて、その頂いただ
 きに近い西の面だけが、かすかに日の光を照りかえして
 赤ずんでいた。いつの間にか雲一ひらもなく澄み互わたった

空の高みに、細々とした新月しんげつが、置き忘れられた光のよ
うに冴さえていた。一同は言葉少なになつて急ぎ足に歩い
た。基線道路と名づけられた場内の公道だつたけれども
畦道あぜみちをやや広くした位くらいのもので、畑から抛ほうり出された
石ころの間なぞに、酸漿ほおずきの実が赤くなつてぶら下がつた
り、轍わだちにかけられた露ふきの葉がどす黒く破れて泥にまみ
れたりしていた。彼は野生になつたティモシーの莖を抜
き取つて、その根もとのやわらかい甘味を噛みしめなど
しながら父のあとにつづいた。そして彼の後ろから来る
小作人達のささやきのような会話に耳を傾けた。

「夏作があんなだに、秋作がこれじゃ困ったもんだ」

「不作つづきだからやりきれないよ全く」

「そうだ」

ぼそぼそとしたひとりごとのような声だったけれど

も、それは明かに彼の注意を引くように目論もくろまれている

のだと彼は知った。それらの言葉は父に向けてはうっかりいえない言葉に違いない。しかし彼ならばそれを耳にはさんで黙っているだろうし、そしてそれが結局小作人等にとって不為めにはならないのを小作人達は知りぬいているらしかった。彼には父の態度と同様、小作人達の

こうした態度も快くなかった。東京を発つ時から何となくいらいらしていた心の底が、いよいよはつきり焦らつくのを彼は感じた。そして彼は凡てのことを思うままにぶちまけることの出来ない自分をその時も齒痒ゆく思った。

事務所にはもう赤々とランプが点されていて、監督の母親や内儀さんが戸の外に走り出て彼等を出迎えた。土下座せんばかりの母親の挨拶などに対しても、父は監督に対すると同様に厳格な態度を見せて、やおら靴を脱ぎ捨てると、自分の設計で建て上げた座敷にとおって、洋

服のままきちんと囲炉裡いろりの横座よこざに坐った。そして眼鏡を外す間もなく、両手を顔にあてて、下の方から、禿はげ上がった両鬢りょうびんへとはげしく撫なで上げた。それが父が草臥くたびれた時の仕草であると同時に、何か心にからんだ事のあ
る時の仕草だ。彼は座敷に荷物を運び入れる手伝いをして後、父の前に座を取って、その仕草に対して不安を感じた。今夜は就寝が極めて晩くなるなど思った。

二人が風呂から上がると内儀おかみさんが食膳を運んで、監督しやうばんは相伴なしで話相手をするために部屋の入口かしのこに畏ま
った。

父は風呂で火照った顔を双手りょうてで撫で上げながら、大きくいき息を吐き出した。内儀おかみさんは座にたえない程ぎごちない思いいをしていているらしかかった。

「風呂桶をしかえたな」

父は箸を取り上げる前に、監督をまともに見てこう詰な詰じるように云いった。

「あまり古ふるくなりましたんでついこの間……」

「費用は事務費で仕払ったのか……俺わしの方かたの支し払いらいにななっているのか」

「事務費のほうに計上けいじょうしましたが……」

「矢部に断ことわったか」

監督は別に断りはしなかつた旨むねを答えた。父はそれには別に何もいわなかつたが、黙つたまま鋭く眼を光らした。それから食膳の豊か過ぎることを内儀おかみさんに注意し、山に来たら山の産物が何よりも甘いうまのだから、明日からは必ず町で買物などはしないようにと云い聞かせた。内儀さんはほとほと氣息づまるように見えた。

食事が済むと煙草を燻くゆらす暇もなく、父は監督に帳簿を持って来るように命じた。監督が風呂は勿論食事もつかつていないことを彼が注意したけれども、父は唯「う

む」と云っただけで、取り合わなかった。

監督は一抱えもありそうな書類をそこに持って出た。

一杯機嫌になつたらしい小作人達が挨拶を残して思い思いに帰ってゆく気配が事務所の方でしていた。冷え切つた山の中の秋の夜の静まり返った空気の中を、その人達のあしおと躑音が段々遠ざかつて行つた。熱心に帳簿の頁を繰っている父の姿を見守りながら、恐らく父には聞こえていないであろうその躑音を彼は聞き送っていた。彼には、その人達が途中でどんなことを話し合つたか、小屋に帰つてその家族にどんなうわさ噂をして聞かせたかが色々に想

像されていた。それが彼にとっては何れもこれも快いと思われるものではなかった。彼は征服した敵地に乗り込んだ、無興むきよう味みな一人の将校のような気持ちを感じた。それに引きかえて、父は一心不乱だった。監督に対して有らゆる質問を発しながら、帳簿の不備を詰なって、自分で紙を取りあげて計算しなおしたりした。監督が算盤そろばんを取りあげて計算をしようとして申し出ても、構いつけずに自分で大きな数を幾度も筆算ひっさんしなおした。父の癖として、このように一心不乱になると、極きわめて簡単な理屈りくつが如何どうしても判らないと思われるようなことがあった。監督が

小言こごとを云われながら幾度も説明しなおさなければならな
かった。彼も出来るだけ穩おだやかにその説明を手伝った。
そうすると父の機嫌は見る見る險悪けんあくになった。

「そんなことはお前に云われんでも判わかっている。俺わし
の聞くのはそんなことじゃない。理屈を聞こうとしとる
んではないのだ。早田は俺しのいうことが飲み込めてお
らんから聞きただしているのじゃないか。もう一度俺し
のいうことをよく聞いて見るがいい」

そういつて、父は自分の質問の趣意しゆいを、はたから聞いて
いると極めて廻わりくどく説明するのだったが、よく

聞いていると、成る程と肯うなずかれる程急所にあたったことを云っていたりした。若い監督も彼の父の質問をもつと有り来たりのことのように取っていたのだ。監督は、質問の意味を飲み込むことが出来ると礎はたと答えに窮きゆうしたりした。それは何も監督が不正なことをしていたからではなく会計上の智識と経験との不足から来ているのに相違ないのだが、父はそこに後ろ暗らいものを見つけてもしたようにびしびしとやり込めた。

彼にはそれがよく知れていた。けれども彼は濫みだりなさし出口はしなかった。聊ちやうかでも監督に対する父の理解

を補おぎなおうとする言葉が彼の口から漏れると、父は彼に向つて悪意をさえ持ちかねない権幕を示したからだ。彼は単に、農場の事務が今日までどんな工合に運ばれてきたかを理解しようとしてだけ勉つとめた。彼は五年近く父の心に背そむいて家には寄りつかなくなつたから、今までの成り行きが如何どうなっているか皆目見当がつかなくなつたのだ。この場になつて、その間の父の苦心というものを考えて見ないではなかつた。父がこうして北海道の山の中に大きな農場を持つとうと思ひ立つたのも、つまり彼の将来を思つてのことだということもよく知っていた。それを思うと

彼は黙って親子というものを考えたかった。

「お前は夕飯は如何どうした」

そう突然父が尋ねた。監督はいつものとおりの無表情に見える声で、

「いえなに……」

と曖昧あいまいに答えた。父は蒲団ふとんの左角にひきつけてある懐かい中道具ちゆうどうぐの中から、重そうな金時計を取りあげて、眼を細めながら遠くに離して時間を読もうとした。

突然事務所の方で弾条ゼンマイのゆるんだらしい柱時計が十時を打った。彼も自分の時計を帯の間に探さがったが十時半に

なっていた。

「十時半ですよ。あなたまだ食わないんだね」

彼は少し父にあたるような声で監督にこういった。

それにもかかわらず父は存外平気だった。

「そうか。それではもういいから行って食うといい。

俺もお前の年ごろの時分には、飯も何も忘れてからに夜更よふかしをしたものだ。仕事をする以上は外のことを忘れる位くらゐでなくては面白くもないし、甘くゆくもんでもない。……しかし今夜は御苦労だった。行く前にもう一言お前に云っておくが」

そういう発端ほったんで明日矢部と会見するに当つての監督としての位置と仕事を父は注意し始めた。それは懇ろねんろというよりもしちくどい程長かった。監督はまた半時間位、黙つたまま父のいいつけを聞かねばならなかった。

監督が丁寧に一礼して部屋を引き下がると、一種の氣まずさを以て父と彼とは向い合つた。興奮のために父の頬は老年に似ず薄紅うすあかくなつて、長旅の疲れらしいものは何処どこにも見えなかつた。しかしそれだといつて少しも快活ではなかつた。自分の後継者であるべきものに対して何となく心置きのあるような風を見せて、例えば懲こらしめ

のためにひどい小言を与えたあのような気拙きますい沈黙を
 送ってよこした。まともに彼の顔を見ようとはしなかつ
 た。こうなると彼はもう手も足も出なかつた。こちらか
 ら快活に持ちかけて、冗談じょうだん話ばなしか何かで先方の気分をや
 わらがせるといふようなタクトは彼には微塵みじんもなかつ
 た。親しい間まのものが気まきままずまくなつた程ほど気まきままずまいものは
 ない。彼は殆ほとんど悒鬱ゆううつといつてもいいよような不愉快な気
 持もちに沈しんで行いつた。おままけけに二人をままぎぎららすよような物音
 も色彩もそこには見みつつかららななかつた。ななげげししにかかかかつて
 いる額がくといつては、黒住教くろずみきようちうの教主の遺訓いくんの石版せきばんと、大だい

礼服れいふくを着ていかめしく構えた父の写真の引き延ひばしとがあるばかりだった。そしてあたりは静まり切っていた。基石の底のようだった。唯耳を澄ますと、遙か遠くで馬鈴薯をこなしているらしい水車の音が単調に聞こえて来るばかりだった。

父は黙って考えごとでもしているのか、敷島を続けざまにふかして、膝ひざの上に落とした灰にも気づかないでいた。彼はしようことなしに監督の持って来た東京新聞の地方版をいじくりまわしていた。北海道の記事を除いた凡すべては一つ残らず青森までの汽車の中で読み飽あいたもの

ばかりだった。

「お前は今日の早田の説明で農場のことは大抵呑みこめたか」

やや暫くしてから父は取ってつけたようにぽツつりとこれだけいって、はじめてまともに彼を見た。父がくどくどと早田に色々な報告をさせた訳が彼には解ったように思えた。

「大抵解りました」

その答えを聞くと父は疑うたがわしそうにちらつともう一度彼を鋭く見やった。

「随分面倒ずいぶんめんどうなものだろう、これだけの仕事にでも眼鼻いびをつけるということとは」

「そうですねえ」

彼は仕方なくこう答えた。父はすぐ彼の答えの響ひびきの悪さに感づいたようだった。そして又もや忌いまわしい沈黙が来た。彼には父の気持ちこころが十分に解とっていたのだ。三十にもなろうとする息子をつかまえて、自分がこれまでに払はってきた苦勞を事新しくいって聞かせるのも大人気ないが、そうかといつて、農場に対する息子の熱意が憐れなほど燃えていないばかりでなく、自分に対する感かん恩おん

の気持ちも格別動いているらしくも見えないその苦々しにがにがさで、父は老年に兎ともすると附きまつわるはかなさと不満とに悩んでいるのだ。そして何事もずばずばとは云い切らないで、じつとひとりで胸の中に湛たえていような性せいじよう情に或る憐れみさえを感じているのだ。彼はそうした気持が父から直接に彼の心の中に流れこむのを覚えた。彼ももどかしく不愉快だった。しかし父と彼との間隔が余りに隔へだたり過ぎてしまったのを思うと、無闇なことはいいたくなかった。それは結局二人の間を彌縫びほうが出来ない程離してしまうだけのものだったから。そしてこ

の老年の父をそれ程の目に遇わせても平気でいられるだけの自信がまだ彼の方にも出来てはいなかった。だから本当をいうと、彼は誰に不愉快を感じるよりも、彼自身にそれを感じねばならなかったのだ。そしてそれが益々ますます彼を引込思案ひきこみの、何事にも興味を感ぜぬらしく見える男にしてしまったのだ。

今夜は何事も云わない方がいい、そう仕舞に彼は思い定めた。自分では気付かないでいるにしても、実際は可なり疲れているに違いない父の肉体のことも考えた。

「もうお休みになりませんか。矢部氏も明日は早くこ

ここに着くことになっていきますし」

それが父には暢気のんきな言いごとと聞こえるのも彼は承知していいではなかった。父は果して内訌ないこうしている不平に油をそそぎかけられたように思ったらしい。

「寝たければお前寝るがいい」

とすぐ答えたが、それでもすぐ言葉をつづけて、

「そう、それでは俺わしも寝るとしようか」

と投げるように言って、すぐ厠かわやに立って行つた。足は痺れしびを切らしたらしく、少しよろよろとなって歩いて行く父の後姿を見ると、彼はふつと深い淋しさを覚えた。

父はいつまでも寝つかないらしかった。いつもならば頭を枕につけるが早いかすぐいびき鼾になる人が、いつまでも静かにして、しげしげと厠に立った。その晩は彼にも寝つかれない晩だった。そして父が眠るまでは自分も眠るまいと心に定めていた。

二時を過ぎて三時に近いと思われる頃、父の寢床の方から幽かすかな鼾が漏れはじめた。彼はそれを聞きすましてそつと厠に立った。縁板えんいたが蹠あしうらに吸いつくかと思われよう。寒い晩になっていた。高い腰の上は透明とうめいな硝子張ガラスばりになっている。雨戸から空をすかして見ると、一寸指先

きに触れただけで硝子板ガラスいたが音をたてて壊われ落ちそうに
冴せえ切っていた。

将来の仕事も生活も如何どうなつてゆくか分らないような
彼は、この冴えに冴えた秋の夜の底にひたりながら、い
いようのない孤独に攻めつけられてしまった。

物音に驚いて眼をさました時には、父はもう隣の部屋
で茶を啜すすっているらしかった。その朝も晴れ切った朝だ
った。彼が起き上がった縁に出ると、それを窺うかがっていた
たように内儀おかみさんが出て来て、忙いそがしくぐるりの雨戸を
開け放った。新鮮な朝の空気と共に、田園に特有な生き

生きとした匂いが部屋中に漲みなぎった。父は捨てどころに困こうじて口の中に啣ふくんでいた梅干うめぼしの種を勢いよくグーズベリ
ーの繁しげみに放りなげた。

監督は矢部の出迎えに出かけて留守だったが、父の膝ひざ許もとには、もう沢山の帳簿や書類が雑然ざつぜんと開きならべられてあつた。

待つほどもなく矢部という人が事務所に着いた。彼ははじめてその人を見たのだった。想像していたのは丸で違って、四十恰好かつこうの肥った眇眼すがめの男だった。はきはきと物慣れてはいるが、浮薄でもなく、解るところは気持

ちよく解る質たちらしかつた。彼と差向いだつた時とは反対に、父はその人に対して殊の外快活だつた。部屋の中の空気が昨夜とはすっかり變つてしまつた。

「なあに、疲れてなんか居りません。こんなことは毎度で御座いますから」

朝飯をすますところいって、その人はすぐ身支度にかつた。そして監督の案内で農場内を見てまわつた。

「私は実はこちらを拜見するのは始めてで、帳場に任して何もさせていたもんで御座いますから、……尤ももつと報告は確実にさせていましたから決してお氣に障さわるよ

うな始末にはなっていない積りで御座いますが、何しろ少し手を延ばして見ますと、体がいくつあっても足りませんので」

そういって矢部は快げに日の光をまともに受けながら声高に笑った。その言葉を聞くと父は意外そうに相手の顔を見た。そして不安の色が、ちらりとその眼を通り過ぎた。

農場内を一通り見て廻るだけで十分半日はかかった。昼少し過ぎに一同は丁度いい疲れ加減で事務所に戻りついた。

「先まずこれなら相当の成績で御座います。私もお頼まれ甲斐があつたようなものかと思いますが、如何いかな思召でしよう」

矢部は肥っているだけに額ひたいに汗を滲にじませながら、高縁たかえんに腰を下ろすと疲れが急に出了たような様子でこういつた。父にもその言葉には別に異議はないらしく見えた。

しかし彼は矢部の言葉をそのまま取り上げることには出来なかつた。六十戸にあまる小作人の小屋は、貸附けを受けた当時とどれ程改まつているだろう。馬小屋を持っているのは僅かに五六軒しかなかつたではないか。ただ

だだっ広く土地が掘返されて作づけされたというだけで成績が挙がったということが出来るものだろうか。

とうもろこしがら

玉蜀黍穀といたどりで周囲を囲って、むぎわら麦稈を積み乗せ

ただけの狭い掘立小屋の中には、床も置かないで、ならばた板の上にむしろ蓆を敷き、どの家にも、まさかりかぼち

やが大鍋に煮られて、それが三度三度のかて糧になっている

ような生活が、かいこん開墾当時のまま続けられているのを見る

と、彼は如何どうしても或るうしろめたさを感じないではないられなかったのだが、矢部は一体それを如何どう見ているのだろうか。しかし彼はそれについては何もいわな

かった。

「兎も角とかくこれから一つ帳簿の方のお調べをお願い致します……」

その人の癖らしく矢部は滅多に言葉に締めくくりをつけなかった。それが如何いかにも手慣れた商人らしく彼には思われた。

帳簿に向かうと父の顔色は急に引き締まって、監督に對する時と同じようになつた。用のある時は呼ぶからというので監督は事務所の方に退けられた。

きちようめに正座して、父は例の皮表紙の懐中手帳

を取り出して、予かねてからの不審ふしんの点を、からんだような云い振りで問せつしよういつめて行つた。彼はこの場合、懐手ふところをして二人の折衝せつしようを傍觀ぼうかんする居心地の悪い立場にあつた。その代り、彼は生まれてはじめて、父が商売上のかげひきをする場面にぶつかることが出来たのだ。父は長い間の官吏生活かんりせいかつから実業界じつぎようかいにはいつて、主に銀行や会社の監查役かんさやくをしていた。そして名監查役との評判ひようばんを取つていた。一体監查役というものが単に員に備わるといふような役目なのか、それとも實際上の威力いりよくを営利事業の上に持っているものなのかさえ本当に彼にははつきりして

いなかっただ。又彼の耳にはいる父の評判は、営業者の側から云われているものなのか、株主の側から云われているものなのか、それもよくは解らなかつた。若し株主の側から出た噂うわさならだが、営業者間の評判だとすると、父は自分の役目に対して無能力者だと裏書されているのと同様になる。彼はこれらの関係を知り抜くことには格別の興味を有もっていた訳ではなかつたけれども、偶然にも今日は眼まのあたりそれを知るようなはめになった自分を見出したのだ。まだ見なかつた父の一面を見るという好奇心も動かないではなかつた。けれどもこれから展開

されるだろう場面の不愉快さを想像することによって、彼の心はどっちかというと暗くらしくされ勝ちだった。

矢部は父の質問に気軽く答えはじめた。その質問の大部分が矢部にとっては物の数にも足らぬ小さなことのように、

「左様ですか。そういう事ならそう致しても私共の方では決して差支え御座いませんが……」

と行って、軽く受け流して行くのだった。思い入って急所を突くつもりらしく質問をしかけている父は、しばしば背負い投げを喰わされた形で、それでも念を押すよ

うに、

「はあそうですか。それではこの件はこれでいいのですな」

と付け足して、あとから訂正などはさせないぞという氣勢を示したが、矢部はたじろぐ風も見せずに平気なものでだった。実際彼から見ても、父の申出の中には、余りに些末さまつのことに互わたって、相手に腹の細さを見透みすかされはしまいかと思う事もあった。彼はそういう時には思わず知らずはらはらした。何処どこまでも謹恪きんかくで細心な、その癖商売人らしい打算ださんに疎うとい父の性格が、あまりに痛々

しく生粹きつすいの商人の前にさらけ出されようとするのが剣呑けんのおんにも気の毒にも思われた。

しかし父はその持ち前の熱心と粘り気ねばとを武器にしてひた押しに押しして行った。さすがに商魂しょうこんで鍛え上げたような矢部も、こいつはまだ出くわさなかつた手だぞと思うらしく、ふと行き詰まって思案顔をする瞬間もあった。

「事業の経過は大体得心とくしんが行きました。そこでと」
 父は開墾かいこんを委託いたたくする時に矢部と取り交わした契約書けいやくしょを、「緊要書類きんようしるい」と朱書きしゆがした大きな状袋じょうぶくろから取り出

して、

「この契約書によると、成墾引継の上は全地積の三分の一をお礼としてあなたの方に差上げることになってるのですが……それがここに認めてある百二十七町四段歩なにがし……これだけの坪敷になるのだが、その通りですな」

と粗い皺あらしわの出来た、短い、しかし形のいい指先で数字を指し示した。

「はいその通りで……」

「そうですね。ええ百二十七町四段二畝せぶなり歩也です。と

ころがこれっぱかりの地面をあなたがこの山の中にお持ちになつていたところで万事に不便でもあろうかと……これは私だけの考えを云つてゐるんですが……」

「その通りで御座います。それで私もとうから……」
「とうから……」

「左様、とうからこの際には土地はただただかないことにして、金でお願いが出来ますれば結構だと存じていたので御座いますが……しかし、何、これとても謂いわば我儘わがままで御座いますから……御都合も御座いませうし……」

「とうから」と聞きかえした時に父の方から思わず乗

り出した気配けはいがあつたが、すぐとそれを引き締めるだけの用意は欠かいていなかった。

「それはこちらとしても都合のいいことではあります。しかし金高の上の折り合いがどんなものですか。昨夜早田と話をした時、聞きただして見ると、この辺の土地の売買は思いの外安いものですよ」

父は例の手帳を取り出して、最近売買の行なわれた地所の価格を披露ひろうしにかかると、矢部はその言葉を奪うように大体の相場を自分の方から切り出した。彼は昨夜の父と監督との話を聞いていたのだが、矢部のいうところ

は（始終札幌にいてこの土地に来たのは始めてだと云つたにもかかわらず）決してけたを外ずれたようなものではなかつた。それを聞く父は意外に思ったらしかつたが、彼も一寸驚かされた。彼は矢部と監督との間に何か話合いがちやんと出来ているのではないかとふと思つた。まして父がそううたぐるのは当然なことだ。彼はすぐ注意して父を見た。その眼は明かに猜疑さいぎの光を含んで、鋭く矢部の眼をまともに見やっていた。

最後の白兵戦はくへいせんになつたと彼は思つた。

もう夕食時はとうに過ぎ去っていたが、父は例の一徹いつてつ

からそんなことは全く眼中になかった。彼はかくばかりせま迫り合った空気をなごやかにするためにも、暫くの休戦は都合のいいことだと思つたので、

「もう大分おそ晩くなりましたから夕食にしたら如何どうでしょう」

と見て見た。それを聞くと父の怒りは火の燃えついたように顔に出た。

「馬鹿なことをいうな。この大事なお話がすまない中にそんな失礼なことが出来るものか」

と矢部の前で激しく彼をきめつけた。興奮が来ると人

前などを構かまつてはいない父の性癖せいへきだったが、現在矢部の前でこんなもののいい方をされると、彼も思わずかつとなつて、謂いわば敵を前において、自分の股肱ここうを罵ののしる將軍が何処どこにいるだろうと憤いきどおろしかつた。けれども彼は黙もくつて下を向むいてしまつたばかりだつた。そして彼は自分の弱い性格を心の中でもどかしく思おもつていた。

「いえ手前で御座いますならまだいたただきたくは御座
 いませんから……全くこのお話は十分に御了解ごりようかいを願ねがう
 ことにしないと何で御座いますから……しかし御用意が
 できましたのなら……」

「いや出来て居っても少しも構かまわんのです」

父は矢部の取りなし顔な愛想あいそうに対して膠にべなく応じた。

父はすぐ元の問題に返った。

「それは早田からお聞きのことかも知れんが、仰おっしや有った値段は松澤農場に望み手があって折合った値段で、村一帯の標準にはならんのですよ。先ず平均一段歩二十円前後のものでしうか」

矢部は父の余りの素朴そぼくさにユウモアでも感じたような態度で、にこやかな顔を見せながら、

「そりや……しかしそれじゃ全く開墾費の金利きんりにも廻

りませんかからなあ」

と云ったが、父は一気にせきこんで、

「しかし現在、そうした売買になつてゐるのだから。あなた今開墾費と仰有おつしやつたが、こうつと、お前一つ算盤そろばんをおいて見ろ」

先程の荒い言葉の埋合せでもするらしく、父はやや面をやわらげて彼の方を顧かえりみた。けれども彼は父と同様珠算しゆざんというものを全く知らなかつた。彼がやや赤面せきめんしながらそこらに散らばつてゐる白紙と鉛筆とを取り上げるのを見た父は、又しても理材りざいにかけての我が子の無能さ

をさらけ出したのを悔くいて見えた。けれども息子の無能な点は父にもあったのだ。父は永年国家とか会社銀行とかの理財事務にたずさわっていたけれども、筆算ひっさんのことにかけては、極度に鈍重どんちゆうだった。そのために、自分の家の会計を調べる時でも、父はどうかすると一寸した計算に半日も坐りこんで考えるような時があった。だから彼が赤面しながら紙と鉛筆とを取り上げたのは、そのまま父自身のやくざな肖像画しょうざうがにも当たるのだ。父は眼鏡の上からいまいましそうに彼の手許をながめやった。そして一段歩に要する開墾費の大体をしめ上げさせた。

「それを百二十七町四段二畝歩にするといくらになるか」

父はなお彼の不器用ぶきような手許から眼を放さずにこう追っかけて命令した。そこで彼はもうたじろいでしまった。

彼は矢部の眼の前に自分の愚おろかしさを暴露ばくろするのを感じつつも、たどたどしく百二十七町を段に換算かんさんして、それに四段歩を加えはじめた。しかし待ち遠しそうに二人から覗のぞき込まれているという意識は、彼の心の落着きを狂わせて、ややともすると簡単な九々すらが頭に浮かび上がって来なかった。

「そこは七じやなかろうが、四だろうが」

父はこんな差出口さしでぐちをしていたが、その言葉が段々荒々しくなつたと思つたと、突然「ええ」と言つて彼から紙をひつた。ひつた。ひつた。

「その位くらいのことが出来んでどうするのか」

明らかと怒号どごうだつた。彼は寧ろ呆氣むしあつけに取られて思わず父の顔を見た。泣き笑いと怒りに入れ交まじつたような口惜くちおしげな父の眼も烈しく彼を見込んでいた。そして極度の侮蔑ぶべつをもつて彼から矢部の方に向きなおると、

「あなた一つお願いしましよ、一寸算盤そろばんを持って下

さい」

とほとほと好意をこめたと聞こえるような声で云った。

矢部は平気な顔をしながらすぐさま所要しよようの答えを出してしまった。

もうこれ以上彼のいる場所ではないと彼は思った。そしてふいと立ち上がると構わずに事務所の方に行ってしまった。

座敷とは事かわって、すっかり暗らくなつた囲炉裡いろりのまわりには、集つて来た小作人を相手に早田が小さな声

で浮世うきよ話をばなしをしていた。内儀おかみさんは座敷の方に運ぶ膳ぜんのものが冷えるのを気にして、椀わんのものをまたもとの鍋にかえしたりしていた。彼がそこに出て行くと、見る見るそこの一座の態度が変わって、いやな不自然さが漲みなぎってしまった。小作人達は慌あわてて立ち上がるなり、草鞋わらじのままの足を炬ばたから抜いて土間どまに下り立つと、恭うやうやしく彼に向って腰を曲げた。

「若い旦那だんな、今度はまあ御苦勞様で御座います」
 その中で物慣れたらしい半白はんぱくの丈たけの高いのが、一同に代わってのようになこういった。「御苦勞はこっちのこ

とだぞ」そうその男の口の裏は云っているように彼には感じられた。不快な冷水れいすいを浴びた彼は改めて不快な微温びおん湯とうを見舞われたのだ。それでも彼は能あたうかぎり小作人達に對して心置きなく接していたいと願った。それは単にその場合のやり切れない気持から自分がのがれ出たかったからだ。小作人達と自分とが、本当に人間らしい気持で互たがいに膝ひざを交まじえることが出来ようとは、夢にも彼は望み得なかつたのだ。彼と雖いえどもさすがにそれほど自己を偽ぎ瞞まんすることは出来なかつた。

けれども余りといえば余りだった。小作人達は、

「さあ、ずっとお寄りなさつて。今日は晴れているためかめつきり冷えますから」

と早田が口添くちぞえするにもかかわらず、彼等はあてこすりのように暗い隅すみっこを離れなかつた。彼は軽い捨て鉢な気分でその人達に構わず囲炉裡いろりの横座よこざに坐りこんだ。

内儀おかみさんがランプを座敷に運んで行つたが、帰つて来ると父からのいい附けを彼に伝えた。それは彼が小作人の一人一人を招まねいて、その口から監督に対する訴訟そしやうと、農場の規約きやくに関する希望とを聞き取っておく役廻りで、昨夜寝る時に父が彼に命令した仕事だった。小作人がつ

ぎつぎに事務所をさして集まってきたのだ。

事務所に薄ぼんやりと灯が点された。燻製の魚のよう
 な香いと、燃えさしの薪の煙とが、寺の庫裡のようにな
 らんと黝ずんだ広間と土間とに籠って、それが彼の頭の
 中へまでも浸み透って来るようだった。何ともいえない
 嫌悪の情が彼を焦ら立たせるばかりだった。彼はそこを
 飛び出して行って畑の中の広い空間に突っ立って思い存
 分の呼吸がしたくて堪らなくなった。壁訴訟じみたこ
 とを発いてかかって聞き取らねばならない程農場という

ものの経営は入り組んでいるのだろうか。監督が父の代から居ついていて、着実に正直なばかりでなく、自分を一人の平凡人であると見切りを付けて、満足して農場の仕事だけを守っているのは、彼の歩いて行けそうな道ではなかったけれども、彼はそういう人に対して暖かい心を持たずにはいられなかった。その人を除けものにしておいて、他人にその^{うわさ}噂をさせて平気で聞いていることは如何^{どう}しても彼には出来ないと思った。

兎も角、彼は監督に頼んで執務室^{しつむしつ}に火を入れて貰って、小作人を一人一人そこに呼び入れた。そして農場の経営

に關する希望だけを聞くことにした。五六人の人が出は
いりする前に、彼は早くもそんなことをする無益さを思
い知らねばならなかった。頭の鈍にぶい人達は、申立つべき
希望の端くれさえ持ち合わしてはいなかったし、才さいかく覺の
ある人達は、滅多なことは決して口にしなかった。去年
も今年も不作で納金のうきんに困る由よしをあれだけ匂におわしておきな
がら、いざ一人になるとそんな明らかなことさえ訴えよ
うとする人はなかった。彼はそれでも十四五人までは我が
慢まんしたが、それで全く絶望してもう小作人を呼び入れる
ことはしなかった。そして火鉢の上に掩おおいかぶさるよう

にして、一人で考えこんでしまった。何ということもなく、父に対する反抗はんこうの気持が、押さえても押さえても湧き上がって来て、如何どうすることも出来なかった。

程経へてから内儀おかみさんが恐る恐るやって来て、夕食の支度が出来たからと行って来た。食慾は不思議に無くなっていたけれども、彼はしよることなしに父の座敷へと帰って行った。そこはもうすっかり片付けられていて、矢部を正座に、父と監督とが鼎座かなえざになって彼の来るのを待っていた。彼は押し黙ったまま自分の座についたが、部屋にはいると共に感ぜずにはいられなかったのは、そこ

に漂ただよっている何ともいえぬ気まずい空気だった。先程まで少しも物にこだわらないで、自由に話の舵かじを引いていた矢部が一番小むずかしい顔になっていた。彼の来るのを待って箸はしを取らないのだと思ったのは間違いらしかった。

矢部は彼が部屋にはいつて来るのを見ると、余計顔色を陰けわしくした。そしてとうとう堪りかねたようにその眇眼すがめで父を睨にらむようにしながら、

「折角のおすすりめでは御座いますが、私は矢張御馳走にはならずたに発さつって札幌ほろに帰ると致します。何、あなた

一晩先きに帰っていませば一晩だけ余計仕事が出来ると
 いうもので御座いますから……私は御覧の通りの青造あおぞうで
 は御座いますが、幼少から商売の方では随分たたきつけ
 られたもんで……しかし今夜ほどあらぬお疑いを被こうむつ
 て男を下げたことは前後に御座いますまいよ。兎に角商
 売だつて商売道しょうばいどうと申します。不束ふつつかながらそれだけの道
 は尽つくした積りで御座いますが、それを信じていただけな
 ければお話には継つぎ穂の出ようがありませんです。……
 じゃ早田君、君のことは十分申上げておいたから、これ
 からこちらの人になつて一つ堅固けんごにやつて上げて下さい

まし。……私はこれで失礼致します」

とはきはき云って退けた。彼にはこれは実に意外の言葉だった。父は黙ってまじまじと癩癩玉かんしやくだまを一時にたた敲きつけたような言葉を聞いていたが、父にしては存外おだや穏かななだめるような調子になっていた。

「何も俺わしはそれ程あなたに信用を置かんというのではないのですが、事務はどこまでも事務なのだから明かにしておかなければ私の気が済まんのです。時刻も遅いからお泊りなさい今夜は」

「難ありがと有う御座いますですが帰らせていただきます」

「そうですか、それでは已^やむを得ないが、では御相談の方は今までのお話通りでよいのですな」

「御念^{ごねん}には及びません。よいようにお取り計らい下さればそれでもう結構で御座います」

矢部はこの上口をきくのも嫌やだという風で挨拶一つすると立ち上った。彼と監督とは事務所の方まで矢部を送って出たが、監督が急がしく靴をはこうとしているのを見ると、矢部は押しかえすような手つきをして、

「早田君、君が送ってくれては困る。荷物は誰かに運ばせて下さい。それでなくてさえ且那はお互いの間を妙^{みょう}

にからんで疑っておいでになるのだ。しかし君のことはよくお話ししておいたから……万事が落着らくちやくするまでは君は私から遠退とおのいているようにしてくれ給えたま。送って来ちやいけませんよ」

それから矢部は彼の方に何かいいかけようとしたが、彼に対してさえ不快を感じたらしく、監督の方に向いて、「六年間只奉公あげくして挙句はての果に痛くもない腹を探られさぐたのは全くお初はつだよ。私も今夜という今夜は、慾もへちまもなく腹を立てちやった。じやこちらがすっかり片付いた上で、札幌にも出ておいでなさい。その節万事私

の方の片はつけますから。御免」

「御免」という挨拶だけを彼に残して、矢部は星だけがきらきら輝いた真暗らなおもてへ駈かけ出すように出て行ってしまった。彼はそこに立ったまま、こんな結果になつた前後の事情を想像しながら遠ざかつてゆく靴音を聞き送っていた。

その晩父は、東京を発たつた時以来何処どこに忘れて来たかと思ふような笑い顔を取りもどして晩酌ばんしやくを傾かたむけた。そこに行くとき余り融通ゆうづうの利きかない監督では物足らない風で、彼を対あいて手に話を拈ねげて行こうとしたが、彼は父に對

する胸一杯の反感で見向きもしたくなかった。それでも父は気に障さえなかつた。そして仕方なしに監督に向きなおって、その父に当たる人の在ざい世せい当時の思い出話などをして一人興きようがった。

「元氣のいい老人だつたよ、どうも。酔うといつでも大肌おおはだぬぎになつて、坐つたまま独り角ずもう力を取つて見せたものだつたが、どうした癖か、唇を締めておいて、ぷつぷつと唾つばきを霧きりのように吹き出すのには閉へい口こうした」

そんなことを大袈裟おおげさに云い出して父は高笑たかしょういをした。監督も懐かい旧きゆうの情を催すらしく、人のいい微笑びしょうを口のは

たに浮かべて、

「ほんとにそうでした」

と気の無さそうな合槌あいづちを打っていた。

その中に夜はいい加減更ふけてしまった。監督が膳ぜんを引いてしまうと、気まずい二人が残った。しかし父の方は少しも気まずそうには見えなかった。矢部の前で、十一二の子供でも叱しかりつけるような小言をいったことなどから、すっかり忘れてしまっているようだった。

「うまいことに行つた。矢部という男は予かねてから中々手ごわい伶俐りこうもの者だと睨にらんでいたから、俺わしは今日の策戦さくせん

には人知れぬ苦勞をした。その甲斐あって、先方がとうとう腹を立ててしまったのだ。掛引きで腹を立てたら立てた方が負け勝負だよ。貸し越しもあったので実は余計心配もしたのだが、そんなものを全部差引くことにして報酬ほうしゆう共に五千円で農場全部がこちらのものになったのだ。これでこの農場の仕事は成功に終わったといっている訳だ」

「私には少しも成功とは思えませんが……」
これだけをいうのにも彼の声は震ふるえていた。しかし日頃の沈黙に似ず、彼は今夜だけは思う存分に云ってしま

わなければ、胸に物がつまっていて、当分は寝ることも出来ないような暴れたあば気持ちになってしまっていたのだ。

「今日農場内を歩いて見ると、開墾のはじめにあなたとここに来ましたね、あの時と百姓の暮し向きは同じなのに私は驚きました。小作料を徴収ちようしゆうしたり、成墾費が安く上ったりしたことには成功したかも知れませんが、農場としては一体どこが成功しているんでしよう」

「そんなことを云ったってお前、水呑百姓みずのみひやくしやうといえは何時いつの世にでも似たり寄ったりの生活をしているもの

だ。それが金持ちになったら汗水垂^たらして畑をするものなどは一人もいなくなるだろう」

「それにしてもあれはあんまりひど過ぎます」

「お前は百歩を以^{もつ}て五十歩を笑つとるんだ」

「しかし北海道にだって小作人に対してずっといい分配りを与えているところは沢山ありますよ」

「それはあつたとしたら帳簿を調べて見るがいい、屹^{きつ}度損^{とそん}をしているから」

「農民をあんな惨^{みじ}めな状態におかなければ利益のないものなら、農場という仕事はうそですね」

「お前は全体本当のことがこの世の中にあるとでも思
つとるのか」

父は息子の融通ゆうづうの利きかないのにも呆あきれるというように
そつぽを向いてしまった。

「思ってはいませんがね。しかし私には如何どうしても現
在のようにうそばかりで固めた生活ではやり切れませ
ん。矢部という人に対してのあなたの態度なども、お考
えになったらあなたもおいやでしょう。丸まるでぺてんです
ものね。始めから先方に腹を立てさす積りで談判をする
などというのは、馬鹿々々しい位くらい私にはいやな気持ち

です」

彼は思い切ってここまで突込んだ。

「お前はいやな気持ちか」

「いやな気持ちです」

「俺わはいい気持ちだ」

父は見下だすように彼を見やりながら、徐おもむろに眼鏡を外すと、両手で顔を逆撫さかなでに撫で上げた。彼は憤激ふんげきではち切れそうになった。

「私はあなたをそんな方だとは思っていませんでしたよ」

突然、父は心の底から本当の怒りを催もよおしたらしかった。

「お前は親に対してそんな口をきいていいと思つとるのか」

「どこが悪いのです」

「お前のような薄ぼんやりには解るまいさ」

二人の言葉はぎこちなく途切れてしまった。彼は堅い決心をしていた。今夜こそは徹底的に父と自分との間の黒白をつけるまでは夜明かしでもしよう。父はやや暫く自分の怒りをもて余しているらしかったが、やがて強い

てそれを押さえながら、ぴちりぴちりと句点でも切るように話しはじめた。

「いいか。よく聞いていて考えて見ろ。矢部は商人なのだぞ。商売というものはな、どこかで嘘をしなければ成り立たん性質のものなのだ。昔から土農工商というが、あれは誠と嘘との使いわけの程度ていどによって、順序を立てたので、仕事の性質がそうなっているのだ。一寸見ると何でもないようだが、古人の考えにはおろそかでないところがあるだろう。俺わしは今日その商人を相手にしたのだから、先方の得手えてに乗せられては、みすみす自分で自

分を馬鹿者にしていることになるのだ。と云ってからに俺わしには商人のような嘘は出来ないのだから、無理押しにでも矢部の得手を封ずる外はないではないか」

彼はそんな手にはかかるものかと思つた。

「そんなら或る意味で小作人を詐あざむいて利益を壟断ろうだんしている地主というものはあれほどの階級に属するのでしよう」

「ごういえばああいうそのお前の癖は悪い癖だぞ。物はもつと考えてからいうがいい。土地を貸し付けてその地代を取るのが何いつわが詐いつわりだ」

「そういえば商人だつて幾分人の便利を計つて利益を取っているんですね」

理につまつたのか、怒りに堪えなかつたのか、父は押し黙つてしまった。禿はげ上がった額ひたいの生え際まで充血して、手あたり次第に巻煙草を摘つまみ上げて囲いろり炉裡の火に持つてゆくその手は激しく震ふるえていた。彼は父がこれ程怒つたのを見たことがなかつた。父は煙草をそこまで持つてゆくと、急に思いかえして、そのまま畳の上に投げ捨ててしまった。

やや暫くしてから父は極めて落ち着いた物腰でさとす

ように、

「それ程父に向つて理屈りくつがいいたければ、立派に一人前の仕事をして、立派に一人前の生活が出来た上でいい。何一つようし得ないで物を云つて見たところこころが、それは得手えて勝手てというものだぞ……聞いていればお前はさつきから俺わしのすることを嘘うそだ嘘うそだといの罵のしつとるが、お前は本当のことを何処どこでしたことがあるかい。人と生まれた以上、こういう娑婆しゃばにいればいやでも嘘うそをせにやならんのは人間の約束事なのだ。嘘うその中でも出来るだけ嘘うそをせんようにと心懸こころがけるのが徳とくというものなの

だ。それともお前は俺わしの眼の前に嘘をせんでいい世の中を作って見せてくれるか。そしたら俺わしもお前に未練なく兜かぶとを脱ぐがな」

父のこの言葉ははっしと彼の心の真唯中を割って過ぎた。実際彼は刃のようなひやつとしたものを肉体のどこかに感じたように思った。そして凝り上がるほど肩をそびやかして興奮していた自分を後ろうしめたく見出した。父は更に言葉を続けた。

「こんな小さな農場一つをこれだけにするのに俺わしがどれ程苦心をしたかお前は現在見ていた筈はずだ。いらざ

る取越し苦労ばかりすると思うかも知れんが、あれ程の用意をしても世の中の事は水が漏れたがるものでな。そこはお前のような理屈一遍では迎も解るまいが」

成る程それは彼にとっては手痛い刃だ。そこまで押しつめられると、今迄の彼は何事もいい得ずに黙ってしまっていた。しかし今夜こそはそこを突きぬけよう。そして父に彼の本質をしつかり知って貰おうと心を定めた。

「解らないかも知れません。実際あなたが東京を発つ前からこの事ばかり思いつめていらっしやるのを見てみると、失礼ながらお気の毒にさえ感じた程でした。……

私は全くそうした理想屋りそうやです。夢ばかり見ているような人間です。……けれども私の気持もどうか考えて下さい。私はこれまで何一つ仕出来しでかしてはいません。自体何をすればいいのか、それさえ見極めがついていないような次第です。ひよっとすると生涯こうして考えているばかりで暮すのかも知れないんですが、兎に角嘘をしなければ生きて行けないような世の中が無我無性にいやなんです。一寸待って下さい。もう少し云わせて下さい。……嘘をするのは世の中ばかりじゃ勿論ありません。私自身が嘘のかたまり見たいなものです。けれどもそうでありた

くない気持ちやたらに私を攻め立てるのです。だから自分の信じている人や親しい人が私の前で平気で嘘をやってるのを見ると、思わず知らず自分のことは棚に上げて腹が立って来るのです。これも仕方がないと思うんですが、……」

「遊んでいて飯が食えると自由自在にそんな気持ちも起るだろうな」

何を太平楽たいへいらくをいうかと云わんばかりに、父は憎々にくにくしく皮肉を云った。

「せめては遊びながら飯の食えるものだけでもこんな

ことを云わなければ罰ばちがあたりますよ」

彼も思わず皮肉になった。父に養われていればこそこんな辱はずかしめも受けるのだ。何という弱い自分だろう。彼は皮肉をいいながらも自分の腑ふ甲が斐いなさをつくづく思
い知らねばならなかった。それと同時に親子の関係がど
んな釘くぎに引かかっているかを垣か間ま見たようにも思った。
親子と雖いえども互たがいの本質に來ると赤の他人に過ぎないのだ
などという淋しさも襲おそって來た。乞食こじきにでもなつてやろう、
彼はその瞬間はたとそう思ったりした。自分の本質のた
めに父が甘んじて衣食を給してくれているとの信賴が、

三十にも手のとどく自分としては虫のよ過ぎる事だったのだと省かえりみられた。

恐らく彼のその心の動きが父に鋭く響いたのだろう、父は今までの怒りに似げなく、自分にも思いがけないような溜息ためいきを吐いた。彼は思わず父を見上げた。父は畳一畳程の前をじっと見守って遠いことでも考えているようだった。

「俺わしがこうして齷齪あくせくとこの年になるまで苦勞しているのもおかしなことだが……」

父の声は改まってしんみりと独りごとのようになっ

た。

「今お前は理想屋だとかいったな。それだ。俺わしはこの通りの男だ。土百姓同様の貧乏士族の家に生まれて、生まれるとから貧乏には慣れている。物心のついた時には父は遠島になつていて母ばかりの暮しだったので、二の時にもう元服げんぷくして、お米倉の米合を書いて母と子二人が食いつないだもんだつた。それに俺わしには道楽どうらくという道楽も別段あるではなし、一家が暮して行くのには勿体ない程の出世をしたといつてもいいのだ。今のような贅沢は実は俺わしに取つては法外なことだがな。けれども

お前ははじめ五人の子を持って見ると、親の心は奇妙きみょうなもの
で先きの先きまで案じられてならんのだ。……それ
にお前は、俺わしのしつけが悪るかつたともいうのか、
生まれつきなのか、お前の今云った理想屋で、てんで俗ぞく
世間せけんのことには無頓着だからな。たとえばお前が世過よすぎ
の出来るだけの仕事にありついたりしても、弟や妹達に
どんなやくざ者が出来るか、不仕合が持ち上がるか知れ
たものではないのだ。そうした場合にこの農場にでもは
いり込んで土をせせつていれば兎にも角にも食いつない
では行けるだろうと思つたのが、こんな面倒な仕事をは

じめた俺わしの趣意しゆいなのだ。……長男となれば、日本では、何といってもお前にあとの子供達の面倒がかかるのだから……」

父の言葉は段々本当に落ち着いてしんみりして来た。

「俺わしは元来がんらい金のことにかけては不得手ふえてしごく至極な方で、

人一倍に苦心をせにや人並みの考えが浮かんで来ん。お前達から見たら、この年をしながら金のことばかり考えていると思うかも知らんが、人が半日で思いつくところを俺わしは一日がかりでやっと思いついて行く有様だから……」

そういつて父は取ってつけたように笑った。

「今の世の中では自分が転ころんだが最後、世間はふり向きもしないのだから……まあお前も考えどおりやるならやって見るがいい。お前が何んと思おうと俺わしは俺わしだけのこととはして行くつもりだ。……『その義にあらざれば一介いっかいも受けず。その義にあらざれば一介いっかいも与えず』という言葉があるな。今の世の中で先ず嘘のないのはこうした生き方の外にはないらしいて」

こう言つて父はぽつつりと口をつぐんだ。

彼は何もいうことが出来なくなつてしまつた。「よし

やり抜くぞ」という決意が鉄丸てつがんのように彼の胸の底に沈むのを覚えた。不思議な感激——それは血のつながりからのみ来ると思わしい熱い、しかし同時に淋しい感激が彼の眼に涙をしぼり出そうとした。

廁かわやに立った父の老いた後姿を見送りながら彼も立ち上がった。縁側えんがわに出て雨戸から外を眺めた。北海道の山の奥の夜は静かに深更しんこうへと深まっていた。大きな自然の姿が遠く彼の眼の前に拈ひろがっていた。

（一九二三年五月、「泉」所載）

日本文学電子図書館

小さき者へ

著 者：有島武郎

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和43年7月30日 30版



日本文学電子図書館